はじめに

——なぜロシア経済を学ぶのか——

ロシア経済を学ぶことは実に興味深く刺激に富む。これが本書のメッセージである。科学の発展には実験が欠かせない。規範となっているルールが作用しているのか，それともまったく別のあるいは新しい規範が存在しうるのか。対象を分析し，その検証・実験を繰り返すことで真の姿が見えてくる。人間社会を直視する社会科学はそうした人為的な実験にはなじみにくいが，ロシアはいろいろな自然実験（偶発的な事象を含む過去の出来事が現在の状況に及ぼす影響の検証）の要求にこたえてくれる。例えば，経済学者はあたかも自分が見てきたように論ずるが，資本主義の勃興期など誰も見たことがない。しかし，ロシアはそれをリアルな姿で見せてくれる。まずは，ロシア経済のどこが興味深いのか，日本と比較しながら考えてみよう。

もっとも近い隣の大国

ロシアは，北方領土問題を抱えている日本（人）にとって決して好印象の国ではない。長年にわたる領土問題の存在がわだかまりの最大の原因であるが，それにとどまらない。2022年２月24日のウクライナへの全面侵攻が決定打となり，世界平和の「破壊者」のイメージはもはや拭い去ることはできそうもない。それに加えて，長期政権を誇る強面のウラジーミル・プーチン大統領も好感度の高い人物とは程遠い。2026年４月現在，日本がロシアに経済制裁を科し，ロシアは日本を非友好国と見なして敵対関係にあることが現状の相互認識であり，相互の立ち位置である。

しかし，隣人は選ぶことができない。日本に最も近い隣の大国はロシアにほかならない。相互認識に関わりなく，日本はロシアから多くの影響を受けてきた。ロシア文学はその最たるものである。日本語への翻訳作品の多さで見れば，ロシア文学の存在感は圧倒的である。アメリカの文学者は思いつかなくても，フョードル・ドストエフスキー，レフ・トルストイ，アントン・チェーホ

フ，アレクサンドル・プーシキンなど著名な文学者の名前は，作品を読んでいなくても思いつく。自らもロシア語に通じていた岩波茂雄が，ロシア文学の日本語訳を出版するために岩波書店を立ち上げた逸話はよく知られている。

日ロ両国の経済関係は今般の戦争により冷え込み，政治的な摩擦の中で決して良好な関係とは言えないが，市場としてのロシアの魅力は決して小さくない。実際のところ，ソ連時代から，日本の大手商社や大手企業が注目してきたことも事実である。減少気味とはいえ人口１億4000万人規模は欧州随一であり，言うまでもなく面積では世界最大の国である（日本の約45倍に上る）。ユーラシア大陸に東西に広がるロシアはヨーロッパとアジアをつなぐように位置しており，そこには石油・天然ガスといったエネルギー資源はもちろん，金，ダイヤモンド，白金，ニッケル，パラジウム，クリプトン，ネオン，マグネシウムなど，種々の希少資源に満ち溢れている。それらは，半導体にはもちろん，環境技術にも欠かせない資源であり，長い目で見ると地球の環境保全に欠かせない。さらに，シベリアの自然や北極海など，21世紀の技術発展にとって魅力満載の地域でもある。

日本は伝統的に隣人の研究が決して十分とは言えない。特に，ロシアとは対立するほど，ビジネスの重要性が下がるほど，軽視あるいは無視さえする風潮が強い。日本の大学におけるロシア語やロシア経済に関する科目・講座・専門課程はビジネスが良好な時代には拡大したが，逆に低迷すれば「選択と集中」の中で整理対象に位置づけられ，今は極めて厳しい状況に直面している。学問はビジネスに従属してきたが，同じ問題はビジネス界にも見てとることができる。長期戦略を持っていない日本企業の多くは，いったんロシアビジネスが低迷すると，それを維持するだけの体力を持ち合わせていない。そのため，ロシアを対象とした自前のビジネスパーソンを育て上げることができず，一挙に競争力を失うことになる。こうした異常なほどの隣人軽視姿勢は，国家戦略において経済安全保障を重視する世界的な潮流とはまったく相容れない。情報が物を言う時代に，日本は情報を持たずに隣人を見ているのと同じである。隣人を等身大で分析する能力は，それを失ってから初めて研究教育上の重要性を認識するだろうが，その時点ではもはや取り返しがつかなくなっているだろう。最も近い隣人こそ研究するべき存在である。

日本と共通する後発性の歴史

経済学は資本主義の先進国（イギリスやアメリカなど）をモデルとして発展してきた。後発の資本主義国は，それらの国々との違いで独自性が注目されてきたと言っても過言ではない。後発国が経済発展（工業化）する場合に特別に注目された国が，ロシア（ソ連）と日本である（ガーシェンクロン，2005）。いずれにも「後発性の利益」が存し，後発国であるがゆえに，先進国の技術・資本を利用することで，産業構造の発展においてキャッチアップが可能となる経済発展の経路をたどることができる。

こうした経済発展の後発性に加えて，資本主義の形成のあり方が先進国とは異なるがゆえに，日本でもロシアでも資本主義論争が生じている。19世紀にヨーロッパとは異なる経済発展，産業革命，農奴解放（1861年）を経験したロシアに形成された資本主義は，西欧のそれに通じるものと見ることができるのか，それともそれ以前の体制に基づくのかが論争の的となり，その後の社会主義化の正統性をめぐる議論にも結びついていた。これと同じように，日本でも明治期に形成された資本主義を近代的なものと見るのか，日本の前近代性に依拠するものかが議論された（日本資本主義論争）。ロシアでは土着の「ロシア社会主義」思想が影響しているとはいえ，欧州の先進国とは異なる資本主義モデルを両国に見出し，それが「普通の資本主義」になるのかについても，後発性の問題に付随して論争になった。重ねて言えば，明治維新後の1871年に四民平等の理念が日本で導入されるが，それに関わりなく，奴隷に相当するような農民は江戸時代にも存していなかったことを考えると，ロシアは日本以上に近代化の歩みから遅れていたということができよう。

世界に形成された資本主義経済モデルは，自由市場モデルと調整市場モデルに分けられ，資本主義そのものが多様であると認識されている（ホール，ソスキス，2007）。日本は後者の調整型であるが，ロシアもまた資本主義のモデルを提示するという点では決して無視できない歴史的存在と言うことができる。経済システムは，「初期条件としての制度の構成要素を与える社会的・文化的要因だけではなく，経済的・政治的利害を反映している」（グライフ，2021，下巻243頁）からである。すでに19世紀以来，ロシアは独自の歴史的・文化的遺産を引き継いでおり，それは決してヨーロッパの基準からは正常とは言いがた

く，経済主体の利害関係もまた過去の遺産から自由ではない。日本と比較するという意味でも，「正常」モデルを形づくったヨーロッパを考える上でも，ロシアは興味深い存在なのである。

異質性の宝庫

社会科学にとって，異質性ほど貴重な素材はない。同じ人間の行為が同じ結果をもたらせば，特に気にも留めないものだが，異なる結果をもたらしたとなると，なぜ違う結果になるのかがぜん科学の対象になる。比較そのものも科学にとって重要な方法と言うことができる。例えば，日本の人口やGDP（国内総生産）は統計上の数値であるが，過去の別の時点と比べる，あるいは同時代の別の地域と比べるだけでも数字が語る意味は大きく違って見えるだろう。

20世紀から21世紀にかけてのロシア経済を考えるとき，多くの経済学者はその経済システムの数奇な「進化」に目を奪われてきた。ロシアは，社会主義という異なる経済システムを世界で最初に実験した国である。「市場の学」と呼んでもいいであろう経済学にとって，社会主義経済システム（国有と計画化）の下での資源配分を構想することは，まさに「未知との遭遇」であった。ここでの学術的な貢献には，商品の需要と供給が一致する均衡価格の導出をめぐる議論が挙げられるが，それに尽きず，経済体制・制度を比較する比較経済学・比較経済体制論・社会主義経済学という新しい学問領域を切り拓いた。どのように社会主義経済システムは機能するのか，そのパフォーマンスをどのように評価すればよいかは，ノーベル賞級の経済学者にとって挑戦しがいのあるテーマであった（Tinbergen, 1954；サムエルソン，1971）。ちなみに，ソ連とロシアは，ノーベル経済学賞を受賞した著名な研究者を幾人か輩出している（受賞順にサイモン・クズネッツ，ワシリー・レオンチェフ，レオニード・カントロヴィッチ，レオニード・ハーヴィッツなど）。

ソ連の解体と社会主義の崩壊もまた，世界の経済学者の知的好奇心を刺激せずにはおかなかった。市場経済への移行過程と経済移行の政策，とりわけ民営化政策に対する研究は，当該地域に精通しているか否かに関わりなく関心の的になった。その過程で移行経済学という学問領域が創出され，資本主義経済システムのつくり方が論議された（岩﨑，2018）。

実際にでき上がったロシアの市場経済は，多くの経済学者が期待した「普通の資本主義」とはかけ離れたもので，プーチン大統領の存在に関わりなく，その姿は異質であった。非公式な仕組みとインフォーマル・セクターは肥大化し，人々の行動は合理性からかけ離れて生き残りを指向した。資本主義の営利企業（会社や銀行）が雨後の筍のように生み出されたが，その成否と生き残りは経営手腕ではなく，コネ，人脈，国家とのつながりに依拠していた。単に出来合いの経済学の教科書に書かれた練習問題ではなく，ロシアは新しい教科書を生み出すだけの「疑問文」を提起してきたのである。その結果，新興市場経済論という新しい分野も誕生している。現在の新興市場は，伝統的な開発経済学の見方には収まらない。飛び越え型のイノベーションの担い手にもなるし（伊藤，2020），新興市場国発祥の多国籍企業も輩出している（Ramamurti and Singh, 2009）。新興市場は市場の制度で見れば独自性を帯びてはいるが，先進国市場と共通する役割を世界市場で果たしている。近年では，新興市場の経済システムとして，中国やロシアを含む国家浸透モデルと東欧を中心とする依存モデルが区分され，先述の自由市場モデルや調整市場モデルとあわせて，資本主義の多様性をめぐる議論がさらに活発化することにロシアも一役買っている（溝端，2022）。

こうして，21世紀の経済学，ひいては社会科学全般を考えるとき，ロシアは異質性，すなわち科学の発展の源泉になる。こうしたロシアの異質性はなにゆえに，またどのように生み出されてきたのか。この点も本書で議論されるべき課題の１つである。

冷戦から戦争へ

ロシアは国際政治経済学から見ても魅力に富む素材である。冷戦の一翼を占め，アメリカに対抗する陣営を構築してきた国であり，ソ連・ロシアの利害を抜きに冷戦は説明できない。また，グローバル化・グローバル危機および国際協調・国際対立の動きを理解するには，国際政治経済学と比較政治経済学を結合することも不可欠と目されている（Nölke, 2023）。そうなると，世界経済を主導するアメリカだけを見ていても世界の動きを読み解くことはできない。

特に，冷戦から新しい冷戦に，そして2022年２月末以降のロシアによるウク

ライナへの全面侵攻は，われわれが生きる世界を新しい時代に導いている。ロシア・ウクライナ戦争は経済制裁を常態化させ，戦時への備えと経済安全保障をあらゆる政策に優先させる位置に押し上げている。もしそうであるとすれば，平時を前提とするような安閑とした経済学は現実を解明できるのだろうか。

問題はさらに複雑である。2026年４月現在，ロシアには歴史的にも世界最大級の経済制裁が加えられている。北朝鮮やイランの比ではない。それにもかかわらず，経済の相互依存関係の回復力が作用し，使い勝手の上がった制裁が効くという神話は戦争を終結させることができない（ミュルデル，2023）。さらには，ロシアの経済システムは戦争耐性・危機耐性を自らに組み込み，戦争を断念するような危機状態ではなく，その継続による経済成長すらもたらしている（溝端，2023）。そこで本書では，危機に対するロシアの耐性の強さの背景にも目が向けられる。

このように，ロシア経済を解剖するということは，冷戦と新しい冷戦，さらに戦争という地球にとって最も副作用の大きい病を解決するための手段を見つける上で欠かせない社会科学の洞察行為となっている（例えば，溝端編，2022）。それは，21世紀の動態的な経済を解明する手がかりを得ることにも貢献するであろう。

「ロシア経済は実に興味深い」，「今ロシアのことを考えずにいつ考えるのか」。これが，本書を通底するロシアに対する見方である。本書全体を通して，ロシア経済の解剖を進め，その醍醐味を感じてもらうとともに，現代社会と現代世界を考えるための視座を導き出す素材をしっかりと見極めてもらいたい。

本書の構成

本書は，「ロシアの国家経済」「ロシア国内経済の諸相」「ロシアと世界経済」の３部で構成される。第Ⅰ部「ロシアの国家経済」では，市場経済化を遂げつつも国家の影響力を強く残しているロシアの経済構造の根幹をとらえる。20世紀の間にロシア帝国，ソ連邦，ロシア連邦と３度も姿を変えた国の経済システムの転換過程を振り返るとともに，経済発展論，社会主義経済論，体制転換論に立脚しながら，その経済システムが経済理論をめぐる議論にどのように影響

してきたかを論じる。異質性の宝庫であるロシアの経済発展は，多数の経済学者に衝撃を与えながら，様々な議論を誘発することで経済学の発展に少なからず寄与してきた。第Ⅰ部を構成する第１章から第５章までは，ロシア経済の基本的特徴を示しながら，それが経済理論の展開とどのように関係してきたのかについて，代表的な経済学者の議論や主張と照らし合わせながら，明らかにしてみたい。

続いて，第Ⅱ部「ロシア国内経済の諸相」では，現在のロシア経済に多様な側面から光を当てる。社会主義経済を資本主義経済に作り替えるという壮大な試みは，中国などの他国でも進められたが，それ以前に形成された経済構造や経済主体のあり方に規定されて，ロシアに特有の市場経済移行の過程を生み出し，それもまた経済学のあり方に多くの教訓と示唆を残した。そこで，第Ⅱ部では財政，金融，雇用・労働，人口・社会保障という４つの章に分けて，各章ごとにロシア経済の現実と照らし合わせながら，その経済学的なインプリケーションを考えてみたい。

最後に，第Ⅲ部「ロシアと世界経済」では，国内経済を国際的なドメインと取り結ぶ代表的な経路である貿易，投資，移民，資源，環境などに焦点を当て，各々の経済理論から導き出される議論や主張を参照しながら，国境を越えて躍動するロシア経済の実態を明らかにする。2014年に始まるウクライナ侵攻後のロシア経済は，同国向けの経済制裁だけでなく，それに対する報復措置であるロシアからの対抗制裁や，一連の制裁合戦が生み出す迂回ビジネスなどを通じて，新たな論点が次々に生み出されている。当然ながら，こうした戦争と制裁の世界から日ロの経済関係も無縁でいられるわけではなく，われわれの日々の生活に確実に足跡を残しつつある。そこから，経済学が学ぶべき点もまた多く，良きにつけ悪きにつけ，ロシア経済は最先端の知見を日々提供している。

地域研究よりも経済学の枠組みを強く意識した本書では，経済・ビジネス一般やロシア経済に関する専門用語がたびたび出てくる。そのため，複数の章に出てくる専門用語については，主要用語解説として最後に一覧にまとめた。また，学習を深めるために，各章ごとに「考えてみよう」と「さらなる学習に向

けて」を作成し，筆者紹介のサイトへのリンクやQRコードをあわせて収録したWEB資料をデジタル・コンテンツとして公開している。WEB資料へのアクセス方法については，目次の末尾を参照されたい。

引用参考文献

伊藤亜聖，2020，『デジタル化する新興国：先進国を超えるか，監視社会の到来か』中央公論新社。

岩崎一郎編著，2018，『比較経済論講義：市場経済化の理論と実証』日本評論社。

ガーシェンクロン，A.／絵所秀紀ほか訳，2005，『後発工業国の経済史：キャッチアップ型工業化論』ミネルヴァ書房。

グライフ，A.／有本寛ほか訳，2021，『比較歴史制度分析』上下巻，筑摩書房。

サムエルソン，P.／都留重人訳，1971，『経済学：入門的分析』岩波書店。

ホール，P.，ソスキス，D.編／遠山弘徳ほか訳，2007，『資本主義の多様性：比較優位の制度的基礎』ナカニシヤ出版。

溝端佐登史，2023，「ロシアにおける制裁耐性とイノベーションリスク」『世界経済評論』第67巻第6号。

溝端佐登史編著，2022，『国家主導資本主義の経済学：国家は資本主義を救えるのか？』文眞堂。

ミュルデル，N.／三浦元博訳，2023，『経済兵器：現代戦の手段としての経済制裁』日経BP。

Nölke, A, 2023, *Second Image IPE : Bridging the Gap between Comparative and International Political Economy,* Palgrave-Macmillan.

Ramamurti, R. and Singh, J. (eds.), 2009, *Emerging Multinationals in Emerging Markets,* Cambridge University Press.

Tinbergen, J., 1954, *Centralization and Decentralization in Economic Policy,* North-Holland Pub. Co.

（溝端佐登史・徳永昌弘）